自己責任にどう向き合うのかの巻

世の中は不景気なまま、物価と税金がどちらも爆上がりするという時代に入りました。
踏んだり蹴ったりです。

　ひとは自分を不幸だと認定すると、すぐにその理由を探します。人によっては外国人労働者のせいで日本人が職を失うとか、生活保護の人が皆ズルをしているとか、すごく狭い視野から他人のせいにしてしまいます。まあそういう考えになびくこと自体は仕方がない。でも「俺らとあいつら」という発想からは分断と闘争しか生まれないし、実際に「あいつら」を世界から消すこともできないので、結局自分も楽になれません。

　なんでも自己責任といって他人を切り捨てる考えが流行るのも、「俺たちにはそんな奴らの世話を焼く余裕はないから勝手に消えてね」という心情によるのだと思います。「そんな奴ら」の中にはいわゆる社会的弱者も多くいるのですが、彼らの既得権とか法的な優遇を逆差別といったりもします。
　要は「自分のことだけでいっぱいいっぱい」という事ですから、不満の出発点が自らの貧乏ないしは欠乏、なのです。だったら先にどうにかしなければならないのはそっちじゃないかと思うのですが、不条理の解消が先、という考えにも一理あります。

　そんな風潮に疑問を感じてもやもやする中で、「格差という虚構」という本を手に取りました。著者は、人間の能力というのは遺伝・環境・偶然という外因で作られるので、能力に自己責任はない、と断じます。ややこしい本ですが、私は普段私たちが前提としている自己責任への思い込みを壊そうとする著者の静かな意気込みに引き込まれました。

　ここからは本書の内容を離れて私の感想になります。
　近代思想では、宗教支配の弱体化を背景に、人間は自由意志を持った主体であり、主体としての個人は平等であるという前提を先に置きます。それは同時に、そういうことにしておかないと都合が悪いという事情もあっての決めごとです。なぜなら個人を基本単位とした社会では、資本家が土地や物を所有し売買するのにも、裁判で罪人の行為を罰するにも「責任」の所在がどうしても必要で、「よく分からないけど何となくやった、と思います」とか「成り行きでそうなりました」は許されない答えなのです。

　決めごとである以上、何かを犠牲にしていることもあり得るという視点は必要です。そこが私にとって最大の気づきでした。基本的人権も自由意志も、人工的に作ったルールであり意図的に採用したシステムなのです。皆がそう信じて共有して初めて常識となり、それが今の世界です。

「自由意志」とか「自己決定権」を前提にすると、すべてが自己責任になります。そうすると、社会はそれでやっていける人とそうでない人に分かれてしまいます。自己責任の発想からは、能力が満たない人にも、お前がそう決めたんだから一人で責任とれよ、と言えてしまう。
自己責任とは、たまたま能力に恵まれた人が自分を律するため以外には使用してはいけない道具なのではないかとさえ思います。病院にいると、いつもそう思います。